

自閉スペクトラム症（ASD）児のコミュニケーションに対する介入経験

○湯浅 美琴¹⁾ 稲川 良²⁾ 金田 建志¹⁾

1) 白ゆり総合リハケアクリニック

2) 水戸メディカルカレッジ 言語聴覚療法学科

【はじめに】

軽度知的障害を伴うASD症例に対しコミュニケーションの質的变化を目指し介入したところ、一定の変化が認められたため報告する。

【症例】

生活年齢13歳の男児。3歳の時に知的障害を伴うASDと診断され、就学まで市の集団療育に参加。12歳の時、やりとりの難しさを主訴に来院しST開始。WISC-IVは、FSIQ65、VC68、PRI65、WMI97、PSI61。言語面は、PVT-Rにて語彙年齢10歳8ヶ月。新版構文検査小児版（STC）にて、聴理解は語順まで通過し4歳前半台、産生は4歳台。受動態や使役の苦手さが目立った。質問応答関係検査は5歳台。応答は簡潔でやりとりの継続に拒否的。自由場面では独語が多く、他者に向けた発信は要求が主だった。表情の絵カードを用いた評価的訓練では、自己経験よりも視覚的に捉えた場面と情動を関連付ける傾向があった。

【病態解釈】

児のやりとりは発語行為が中心であり、発語内行為、発語媒介行為への気付きが必要と考えた。やりとりに対する拒否感、会話のテーマとレーマを類推することの難しさ、自己経験や内部情報を参照することが難しく発話内容が浮かばないこととの関連が推察された。また、視点変換の苦手さから、自己意識の乏しさ、他者視点に立った状況理解の弱さが考えられた。

【治療アプローチと経過】

①受動態や使役の絵カードを用いた情報伝達訓練を行い、文脈の中で注目すべき情報を視覚的に認識すること、発語内行為・発語媒介行為への気付きを促した。また、動作主に伴う動作語の変化に注目させた。②内部情報の認識に向け、表面素材や図形を用いた異種感覚情報変換課題を行った。③自己身体位置を他者身体位置に変換するメンタルローテーション課題を実施し、視点取得能力の発達を狙った。上述の課題を月1回（60分）、12回実施した。4ヶ月目にやりとりが徐々に継続し、8ヶ月目には興味がある話題での発話量が増加した。12ヶ月目には会話に沿った話題提供や、楽しかった出来事を自発的に話す場面が見られた。家庭でも同様の変化は観察された。12ヶ月目のSTCでは理解・産生ともに7歳台で検査上限に達した。

【考察】

相互的なコミュニケーションの発達において認知課題の有効性が示唆された。今後は、言語記述や反応からどのように発達が促されるか検討したい。

【倫理的配慮、説明と同意】

本人および家族に説明し書面にて同意を得た。